きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈1〉

産声

期待を胸に130人入学

都城市の県立都城西高（小村則弘校長、766人）が今年、創立50周年を迎えた。校歌の一節「わかきいのち／きよらに燃やし」は、ひた向きに、そして純粋に文武に打ち込む在校生、卒業生の姿と重なる。半世紀の歩みを振り返り、さらなる高みを目指す同校の今を伝える。（題字は書道部の普通科2年・渡邊彩香さん）

×　×

1962（昭和37）年4月、同市祝吉1丁目の県立都城都島高（現・都城農業高）で都城西高の第1回入学式が開かれた。まだ校名はなかったので、厳密に言うと、都城都島第二高（仮称）の入学式。制服や校歌はおろか、校舎もなく、都城都島高の空き棟を間借りしての出発となった。

同校は戦後のベビーブームや高校進学率の伸びを背景に誕生した。初年度は約130人が入学し、普通科2学級、家政科1学級でのスタート。県内では前後して宮崎南、延岡西高が新設されている。

当時、都城市では都城泉ケ丘高が普通科の伝統校として確固たる地位を築いていた。そんな中、新設校に入学するのは、それなりに勇気がいったはずだ。しかし、新入生の一人、日野篤義(65)＝同市都元町＝は「不安よりも『新しい学校で伸び伸びできる』『伝統をつくっていける』という期待の方が大きかった」と語る。

とは言っても、恵まれた教育環境だったとは言い難い。仮校舎はトタン屋根。雨が降ると、やかましくて教師の声が聞こえない。おまけに老朽化がひどく、雨漏りはもちろん、床も抜ける始末。教室は薄暗く、中馬（旧姓中嶋）圭子(66)＝同市菖蒲原町＝は「とくに雨の日は暗かった。黒板の文字が見えにくくて、近視と勘違いした私は眼鏡を掛けたほどだった」と笑う。

ただ、施設こそ難ありだったが、教師は精鋭がそろえられた。教頭の服部七郎（国語）、英語の野崎一郎、数学の山元喜一ら7人。生徒たちは敬意を込めて「七人の侍」と呼んだ。

開校した年の12月25日、校名が「都城西」に決まった。日野は「それまで『どこの学校なの』と聞かれると、『新設校』と答えていた。校名が決まり、自信を持って答えられるようになり、うれしかった」と回想する。（敬称略）

間借りしていた都城都島高校で記念写真に収まる1回生。この日は「関之尾サイクリング」に出掛けた＝都城西高提供

校訓　理想　優雅　自主自律

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈2〉

〝わが家〟へ

運動場整備に生徒汗

都城西高は開校から1年余りを経た1963（昭和38）年7月15日、間借りしていた都城都島高（現・都城農業高）から現在地の新校舎へと移転した。北西に高千穂峰、東には都城市の市街地を一望できる都原の台地。移転の際、生徒たちは炎天下、それぞれに机やいすを持ち、汗だくになって長い道のりを歩いた。

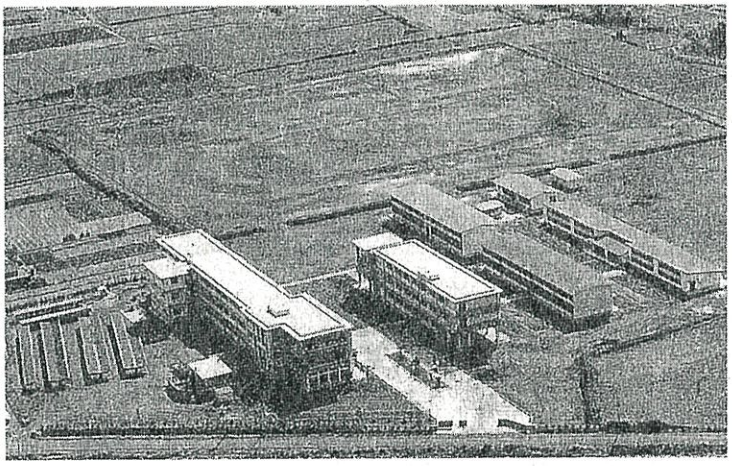
念願の〝わが家〟に足を踏み入れた生徒たちは歓喜し、教師たちは感慨にふけった。理科教諭だった富村智子はこの時の様子を後の「西高新聞」で次のようにつづっている。

「暑い中をみなはウサギのように飛びはね、飛び歩き、『おめでとう』と声をかけあった。（中略）私は自分の部屋に入り、その実験室の床の上に汗ばんだ体をなげ出し、天井を見上げてしばらく休んだ。汗ではない冷たいものが私の頬を幾すじも流れた」

ただ、この時点では学校としては不完全だった。校舎の第2期工事も残っていたが、何と言ってもグラウンド整備が手つかずの状態。体育科教諭の川原利夫（故人）が率先して整備に当たり、生徒たちは体育の時間のほとんどを作業に費やし、自習時間まで駆り出された。

生徒たちは、くわや鎌を手にグラウンド予定地を覆い尽くす雑草と格闘。ひどい所は人の背丈よりも高く、作業は難航した。作業中に蛇やカエルが現れ、カエルは生物の実験材料として〝活用〟。マムシは教師の胃袋に収まることもあった。

2回生の厚澤秀憲(65)＝同市蓑原町＝は「もっこを担いで土を運んだりしたっけ。勉強よりも楽しかった。先日の同窓会でもスクリーンに当時の作業の様子が映し出され、みんな懐かしがっていた」と話す。



移転して間もない校舎全景（都城西高提供）

陸上自衛隊や三股町土木課、都城工業高などの協力もあり、10月27日には第1回体育大会の開催にこぎ着けた。生徒たちは堂々の入場行進を披露した後、赤団と白団に分かれ、自らの汗が染み込んだグラウンドで躍動した。

校内を歩くと、あふれんばかりの緑が心地よい同校。移転当初からPTAや教師が緑化に奔走した。そこから同校を象徴するイチョウ並木などが生まれ、今も昔も生徒に安らぎを与えている。

（敬称略）

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈3〉

制服

色合いこだわり斬新

「他校にはない色が良かった」「私立校と間違われることもあった」―。深い青緑色の都城西高女子生徒の制服。特徴的な色合いは卒業生の記憶に深く残る。2回生の楠元（旧姓村岡）ミヨ子(64)＝都城市中原町＝も「当時は紺色が主流。それに比べると斬新な色で気に入っていた。目立ちすぎて不便さもあったけれど」と苦笑する。

開校した1962（昭和37）年。都城都島高の仮校舎で過ごす女子生徒の制服は、中学時代のものでばらばらだった。早く制服を用意しようと、職員たちは毎日のようにデザインについて意見を交わしたという。

特にこだわったのは色。業者に数種類を用意してもらった中には、紺色や黄土色などもあった。ただ、「一般的でなく、さらに汚れが目立たない色として今の制服が選ばれた」と実習教師だった村上（旧姓山内）規代(72)＝同市妻ケ丘町。また、「太った人でも似合うかという話になり、私が試しに着ることになった。それを見てみんな大丈夫だと納得。決め手はそこにもあったかも」と語る。他校にはない制服を作ろうと考えていた家政科の教諭鈴木松（故人）を含め、全員一致で決定した。

制服はさまざまな歴史や生徒の思い入れがあるが、愛用するのは高校生活のたった3年間。しかし、卒業後もその存在を忘れず、記念すべき日に再び袖を通した卒業生もいる。

36回生の前田（旧姓大迫）利沙(30)＝同市郡元町＝は、一つ上の先輩だった祐侍(31)と2007年に結婚。その結婚の披露宴でお色直しに選んだのが制服だった。「シンプルだけど好きで色も気に入っていた」と利沙。当日は学ラン姿の祐侍と満面の笑みで登場し、周囲からは大きな拍手と歓声が上がった。

退場の際には自転車に2人乗り。高校時代にタイムスリップしたかのような時間を過ごし、「付き合い始めたのが卒業後で、ずっと制服デートに憧れていた。いい思い出になった」と利沙は照れくさそうに話す。

斬新さを売りに作られた制服は、89年にブラウスの襟にリボンが付けられた以外はそのまま。50周年の歴史を語る上で欠かせないものとなっている。（敬称略）

斬新な色合いが特徴的な都城西高女子生徒の制服

校訓　理想　優雅　自主自律

きりしま

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈4〉

校歌

都城西高の開校後、校長の石川侃（故人）は、国語を教えていた教頭の服部七郎に校歌の作詞を指示。服部は校舎の建設予定地である都原台地へ何度も足を運んで歌詞を練り、宮崎師範学校（現・宮崎大）教官の海老原直（故人）が曲を付けた。

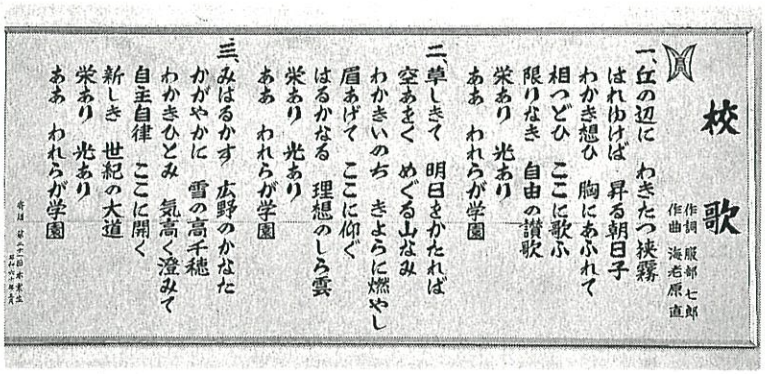
一、三番の歌い出し「丘の辺に／わきたつ狭霧／はれゆけば／昇る朝日子」、「みはるかす／広野のかなた／かがやかに／雪の高千穂」は実景そのまま。服部は後年、「世界に雄飛すべき若人を育成するには誠にふさわしい場所と思えた」と述べている。

応援団 新入生に特訓

第10代校長の木幡良夫(78)＝都城市鷹尾4丁目＝は「わかきいのち／きよらに燃やし／眉あげて／ここに仰ぐ／はるかなる／理想のしら雲」などの歌詞に「学校の精神そのものだ」と感銘を受け、1993年4月に歌詞を簡略化したという校訓「理想・優雅・自主自律」を定めた。

校歌をめぐっては一時期、応援団による新入生への熱血指導が行われた。応援団長を務めていた34回生の平川兼利(32)＝同市祝吉1丁目＝の記憶によると、その指導は次のようなものだった。

入学式翌日、体育館でのオリエンテーションの最後に応援団三、四十人が登場。両手を後ろに組み、叫ぶように校歌を歌い上げ、次は新入生に歌わせる。新入生の周りを歩きながら「おらぁ、ちゃんと歌え！」「声が小さい！」などと怒鳴り、何度も歌い直させる。泣きだす女子生徒も出るが、まったく意に介さない。


校歌

作詞 服部七郎
作曲 海老原直

一、丘の辺に　わきたつ狭霧
はれゆけば　昇る朝日子
わかき想ひ　胸にあふれて
相つどひ　ここに歌ふ
限りなき　自由の讃歌
栄あり　光あり
ああ　われらが学園

二、草しきて　明日をかたれば
空あおく　めぐる山なみ
わかきいのち　きよらに燃やし
眉あげて　ここに仰ぐ
はるかなる　理想のしら雲
栄あり　光あり
ああ　われらが学園

三、みはるかす　広野のかなた
かがやかに　雪の高千穂
わかきひとみ　気高く澄みて
自主自律　ここに開く
新しき　世紀の大道
栄あり　光あり
ああ　われらが学園

作詞　第4代目校長　石川侃
作曲　海老原直

体育館に掲げられている校歌の歌詞。校訓「理想・優雅・自主自律」の基になっている

新入生が大声で歌えるようになったところで終了。平川が新入生の前に立ち、「いろいろな目標、夢を持って入学してきたと思うが、西高生としての誇りも持ってほしい。誇りをどこで表せるのか。校歌なら、歌う声の大きさで表せる。これからも、ぜひ大きな声で歌ってほしい」と締めくくった。

毎年5月、都城泉ケ丘高との野球の定期戦があり、全校生徒が高らかに校歌を歌う。学校全体が一つになる瞬間だ。校歌の特訓は、この一体感を新入生に感じてもらうためでもあった。平川も入学時に同じように校歌をたたき込まれ、特訓の意味を知った。応援団による熱血指導は愛校心を育む一助にもなったが、いつしか姿を消した。

（敬称略）

校訓　理想　優雅　自主自律

さらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈5〉

学科再編

自ら学ぶ姿勢育てる

都城西高は1962（昭和37）年度、普通科と家政科の2学科で開校した。しかし、家政科は女子の大学進学志向の高まりなどを背景に91年度に募集を停止。94年3月に最後の卒業生を送り出し、32年間の歴史に幕を降ろした。

この間、家政科は「思いやりの心」という伝統を築き上げ、全員で月1回、老人ホームを訪れる福祉活動などを実践。豊かな人間性を養ったほか、看護や福祉分野に進んだ生徒も少なくない。

71～87年度の家政科教諭、浜田芳子(73)＝宮崎市学園木花台南3丁目＝は「生徒たちは活動を通じ、進路に目を向け、生き方を考え、社会とのつながりに気付くようになった。家政科がなくなったのは残念だが、思いやりの心は受け継いでほしい」と願う。

同校は95年度、普通科に文科コースを設置。国際的視野を持つ生徒の育成を目的に、英語による表現力、発表力を培った。2004年度には同コースを発展的に解消し、外国語科を新設している。

10年度には外国語科を廃してフロンティア科を創設し、現在に至る。同科は高い学力に加え、コミュニケーション能力や問題解決能力を備えたグローバルに活躍できる人材の育成を目指す。

1年生は週2時間、2年生は同3時間を「フロンティア学」に充てる。1年生では大学から幅広い分野の講師を招く出前講座、教師が学問の面白さを伝える教科別講座を展開。生徒の好奇心や探究心をくすぐり、自発的に学ぶ姿勢を育て、かつ進路選択の土台づくりを促す。文系、理系に分かれる2年生では大学や企業、研究機関などと連携した少人数研修へと移行する。

生徒はいずれの講座、研修でも、個人またはグループでその内容をまとめ、発表する。内容を的確に理解・分析し、考察を加え、それを分かりやすく伝える作業を通じ、読解力や論理的思考、発表力などを養う。

ほかにもキャリア教育のカリキュラムが豊富に用意されており、同科主任の大久保秀輝(52)は「生徒が進路選択を誤らないように多様な分野に触れさせている。興味が湧けば目的意識が生まれ、勉強への姿勢が変わる。全員を一度に変えるのではなく、一人ずつ変える意識で取り組んでいる」と語る。（敬称略）

フロンティア学の研究成果をまとめたポスター展示

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈6〉

学力向上㊤

成績別編成 競争促す

開校当初から「泉ケ丘に追い付け、追い越せ」を合言葉に勉学に打ち込み、今や進学校として知られる都城西高だが、その道のりは決して平たんではなかった。

進学校を見る上での一つの指標である国立大の合格者数。1965(昭和40)年3月卒の1回生は、生徒数が少なく学習環境が整っていなかったこともあり、わずか1人の現役合格にとどまった。

都城泉ケ丘高との生徒の均等、均質化を図るため、入試に合同選抜方式が導入された2回生からは生徒数が増加。しかし、66(同41)年以降も国立大合格者数は21、37、33人…と低空飛行が続き、保護者や地域から厳しい目が向けられた。

勉強しなかったわけではない。開校翌年に宮崎大宮高(宮崎市)から畠中通夫(83)=宮崎市神宮西2丁目=が赴任し、進学指導を担当。2年目から学期中と夏休みに課外授業を行う「大宮方式」を取り入れた。しかし、すぐには結果が出ず、畠中は「当時は雨の日がうれしかった。傘で顔を隠して学校に行けたから。それだけ、地域や保護者の皆さんに申し訳なく思っていた」と振り返る。

そして、7回生の受験結果で衝撃が走る。重視されていた九州大、宮崎大といった一期校の受験生が次々と不合格になったのだ。

すぐに教師たちは動いた。学力的に平等になるような学級編成を見直し、新年度スタートまでの1週間足らずで学力別編成を導入した。新編成では普通科6学級のうち2学級に文系と理系の学力上位者を集めた。畠中は「平等から競争への転換であり、西高の学力向上策の大きな節目になった」と語る。

PTAも動いた。各教室に進学関係の図書を置き、保護者向けの講演会を開くなどして、学校の進学指導を力強く後押しした。

7月には2年生(9回生)が進学実績の顕著な宮崎南高(宮崎市)へ「一日入学」をしている。希望者42人が前日から同市内の旅館に宿泊し、翌日の授業に備えて入念に予習。迎えた当日、生徒たちは授業のスピードや同校生の正確な解答に圧倒され、予習の量と質の違いを痛感。発奮して学校に戻ったという。

これらの取り組みが土台となり、都城西高の進学実績は急速に上向いていく。

(敬称略)

学力向上を図る課外授業に臨むため、朝早く登校する生徒たち

日日新聞　2012年(平成24年)10月1

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈8〉

教育の3本柱

自己と向き合い成長

「黙想・自立・無言学習」。半世紀の歩みの中で、都城西高で生まれた「教育の3本柱」だ。1980年代に無言学習、自立、黙想の順に誕生し、今に受け継がれている。

無言学習は80（昭和55）年度に生徒の学習意欲を高めるため「一人一人が静かに内省する場、内省する時をつくろう」と始まった長時間自習だが、奥底にあるのは「無言・孤独・沈黙の中で自己と向き合い、思索を深化させることで生徒は成長する」という考え方だ。2年生の学年主任だった竹之内秀文(76)＝都城市志比田町＝が発案。学年全体で取り組んで成果を収め、学校を挙げて推進した。

82（同57）年度には主に読書を行う週2時間の「自立の時間」を創設。本がいかに面白く、人間的な成長を促してくれるのかを生徒に理解させ、自立につなげようという狙いがあった。黙想は83（同58）年度に誕生。生徒の心を落ち着かせるため、毎朝2分間行った。いずれも竹之内が主導している。

3本柱が定着して以降、進学実績が急伸し、88（同63）年度は何と240人が国立大に合格。教育誌に紹介され、鶴丸（鹿児島）、ラ・サール（同）、都立西、松本深志（長野）といった名門校をはじめ、全国から視察が相次いだ。

竹之内は91年に作成された旧文部省への報告書の中で、黙想・自立・無言学習の本質は同じだと説明。本質とは「無言、寡黙、沈黙からの出発である」と述べている。

「自己と対話できる生徒を育てたかった。これは人間教育の基本」と、竹之内は振り返る。沈黙を水力発電のダムに例えて「絶え間なく流れる騒音、特に言葉の流れをせき止め、しばらく待つだけで、その個人のあらゆる分野における成長への扉を開いてくれる」と語り、「沈黙は生産力を備えた母体」と説く。

始業時に黙想し、心を落ち着かせる生徒たち。黙想が始まり、ちょうど30年目に当たる

生徒に求めたのは自分でダムを築き、水をためる力。沈黙の中で孤独に耐えながら、自らの心に問い掛け、さまざまな思索を深め、人生の目標や学習の意義を見いだすことだ。あとは一気に水を放つだけ。そうやって飛躍的に成長した生徒を竹之内は何人も見てきた。「生徒が自分で燃える力を持っていれば、教師はいくらでも導ける」。この確信は、3本柱を今実践している在校生へのメッセージでもある。（敬称略）

校訓　理想　優雅　自主自律

きりしま

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈7〉

学力向上㊦

一言も話さずに自習

1975（昭和50）年3月卒の11回生は、都城西高で初の東京大合格者を出すなど目覚ましい成果を母校にもたらした。

彼らを鍛え上げた一人、木幡良夫(78)＝都城市鷹尾4丁目＝は67（同42）年に小林高から赴任。進学指導部に長年在籍し、学力向上に心血を注いだ。着任当初、同校の進学実績は振るわず、木幡は「西高は泉ケ丘高より普通科が2クラス少なく、進学実績にも差が出る。それを保護者すら知らず、西高は批判された。悔しくて、情けなくて涙した」と述懐する。それだけに11回生の活躍はうれしく、「彼らが苦労を喜びに変えてくれた」と笑みをこぼす。

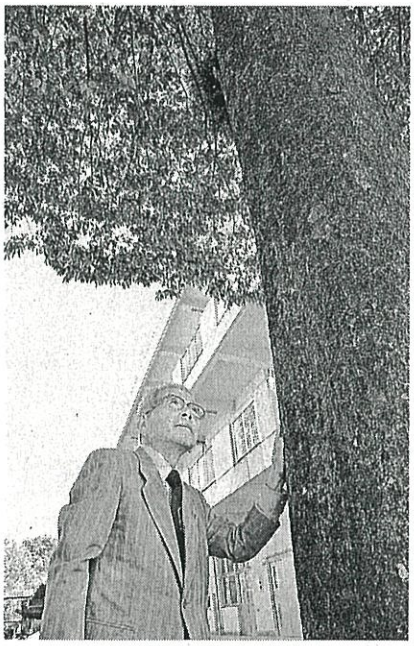
東京大理科二類に合格した11回生、岩村和平(56)＝茨城県龍ケ崎市＝は卒業後、農林水産省に入省。当時について「熱い情熱と高い指導力を備えた先生が多かった。修学旅行で友人2人と京大、東大を訪れ、『九州を出よう。九大の殻を破りたい』と思い、それが目標になった。友人たちも一橋、神戸大に進んだ。今考えると、そういうムードを木幡先生たちが巧みにつくっていたのだと思う。西高で学べてよかった」と語る。

この年の国立大合格者は107人で、宮崎大宮、宮崎南高に次いで県内3位。翌年も同数の合格者を出し進学校としての評価を高めていった。

しかし、教師たちは18回生で試練を迎える。1年生時の校外実力テストで、1位の生徒が都城泉ケ丘高の20位内にようやく入る程度。2年生の後半になっても学習意欲の低い生徒が目立ち、学年主任の竹之内秀文(76)＝都城市志比田町＝は「生徒に今必要なものは何か」と考え込んだ。そして「一人一人が静かに内省する場であり、時である」との結論に至り、学年全体で「無言学習」を断行した。

冬休みの課外授業の3日間を、休み時間も含め一言も発しない自習とした。生徒たちは孤独と戦う中で心を落ち着かせ、集中力を磨いていった。事後の感想文では「こんなに何もかも忘れて勉強できたのは初めてだった」など、覚醒を予感させる言葉が並んだ。

学習への姿勢が変わり、2年生最後の校外実力テストでは九州トップの生徒を出すまでに。その後、無言学習は同校で定着し、驚異的な進学実績へとつながった。（敬称略）



11回生が卒業記念に植樹したケヤキを見上げる木幡。優れた進学実績を上げた11回生は「ケヤキ組」と呼ばれるようになった

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈9〉

熱血教師

愛情込め厳しく指導

高校生活は生徒にとって学力や人間性を高める大切な3年間。それだけに教師は厳しくも優しく生徒を導く。

都城西高が開校して3年目の1964（昭和39）年度から13年間、理科教諭として在職した隈元次也(82)＝都城市千町。着任2年目で3年生の担任になると、夜中の"家庭訪問"を開始した。夜11時、12時、勉強部屋に明かりがついているかを抜き打ちで確認。消灯していると、「勉強しろ！」。自転車にまたがり、鹿児島県曽於市財部町の生徒宅まで足を運んだ。隈元は「大変だったが、都城泉ケ丘高に負けたくないという思いがあった」と振り返る。

竹を割ったような性格と面倒見の良さで特に男子生徒から慕われた隈元。学校が長髪を許可し、髪の手入れにうつつを抜かす男子を目にして、自ら丸刈りになって戒めるなどエピソードは尽きない。

九州大理学部を卒業して教員となり、都城泉ケ丘、宮崎西高の校長などを務めた5回生、下高原信義(62)＝同市鷹尾2丁目＝は「げんこつにも愛情がこもっていた。それが伝わる先生だった。私が教員になる時も、教師の心構えを説いていただき、それが生きた。高校時代の先生ではなく、人生の師」と話す。

23回生の横山哲英(43)＝同市若葉町＝は強く印象に残る教師として、保健体育科の山元幸一(65)＝同市上川東3丁目＝と谷口雄仁(63)＝国富町八代北俣＝を挙げる。ともに生徒指導部に所属し、89年度まで在職した。

生活態度に関する2人の指導は厳しかった。予告なしの容姿検査で髪形や服装が乱れていると、女子であろうが平手打ち。口答えをしようものなら、もう一発。礼儀や言葉遣いにもうるさかった。

「恨まれてもいいから社会で通用する人間にしたかった」と谷口。生徒に「謙虚に言葉を使え。それを頭の中で復唱しろ」と教えていた山元は「言葉を慎重に選ぶ習慣が身に付けば、相手に失礼がなくなる。推薦入試の面接でも、それが功を奏した」と語る。

2人の思いは生徒たちに届いていた。横山は「西高の校風は自由。大切なのは、自由な中で自分を律すること。これは社会に出ても同じ。礼儀などと合わせ、人間として求められる基本的な部分を教わった」と感謝する。

（敬称略）

授業中の隈元。熱血漢で、特に男子生徒から慕われた（1969年の卒業アルバムより）

日日新聞　2012年(平成24年)10月1

さらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈10〉

特色ある教育

選択講座や進路研究

創立以来、教育の質的向上を追い求める都城西高。現在も「西高タイム」「IGI」といった特色ある教育が実践されている。

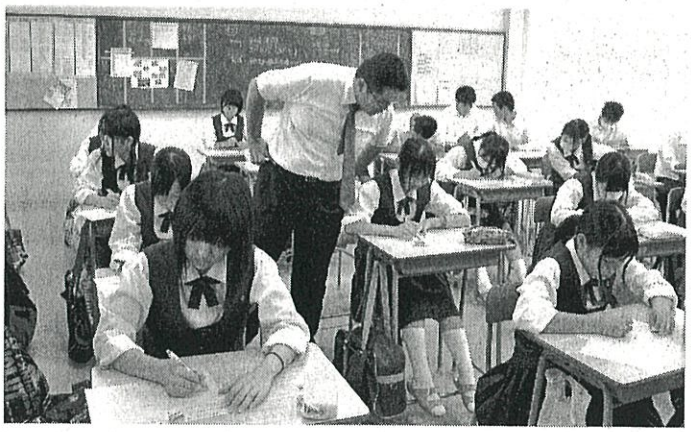
同校の授業は通常の1限50分間ではなく、45分間。1日7限あるので、35分間が浮くことになる。これに10分間を足して45分間の西高タイムを終礼後に行っている。

生徒一人一人のニーズに応えようと2008年度にスタート。苦手な教科・分野の克服に努める分野別講座や、踏み込んだ内容のハイレベル講座、英語検定などの試験対策を行う各検定取得講座などを用意する。生徒は自身が必要とする講座を選択でき、「弱点を克服できた」「得意科目を伸ばせた」などと好評だ。

教師にとっては、通常の授業とは別に教材を作るなど負担が大きい。だが、教務主任の永倉英了(49)は「生徒のためにと、みな頑張っている。さらに生徒の求めに応じたものにしたい」と意欲的だ。

同じく08年度に始まったIGIは1～3年生の「総合的な学習の時間」を体系化したもので、校訓の「理想・優雅・自主自律」を意味する英単語の頭文字から名付けた。生徒に自己理解を深め、自身に合った進路を探してもらい、その実現を支援するのが目的。具体的には、進路研究と小論文学習を柱としている。

進路研究では、1年生は希望する職種・職業、2年生は希望する学部・学科などについて調べて発表する。小論文研究では、1年生は書き方の基本を学習。2年生は資料の分析などに基づく、より高度な小論文作成を学び、進路目標に応じたテーマに挑戦する。この他、幅広い分野から講師を招く講座や講演会を織り交ぜ、進路決定と職業観の養成に役立てる。



西高タイムの数学講座の一つ。この講座では「確率」に苦手意識を持つ生徒が集まり、基本を学んでいた

3年生になると、希望進路別に小論文の作成や口頭試問、集団討議などを行うほか、センター試験の過去問題を分析して分野別に弱点を補強する。

普通科2年の宮田春香(16)は「いろいろな分野の専門家から話を聞けるのがIGIの魅力。さまざまな情報や知識を得られ、進路の選択肢が増えた」と感謝。以前から「なりたい」と胸に秘めた職業もあったが、「視野が広がった今は、他の職業にも興味が出てきた」と楽しそうに話す。(敬称略)

校訓　理想　優雅　自主自律

きりしま

さらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈11〉

部活動㊤

陸上、バスケが活躍

都城西高の体育系部活動は全部で15。進学校のため練習時間は短いが、50年の歴史をたどると、全国大会や県大会で優秀な成績を収めた競技は少なくない。中でも、陸上からは同校唯一の全国高校総体覇者が誕生している。

1978（昭和53）年の県高校総体陸上女子400㍍。16回生の大山（旧姓久保田）真由美(51)＝高鍋町北高鍋＝は、2年生ながら55秒6という当時の全国高校新記録をマークした。

一気に注目を集めた逸材は「大きな大会ほどモチベーションが上がった」。持ち前のスピードと持久力を備えた走りで、ライバルたちを圧倒。見事、全国総体の表彰台の頂点に立った。

翌年は宮崎国体にも出場。大会前に体調を崩すアクシデントに見舞われ、さらに専門種目ではない少年女子800㍍での勝負だったが堂々の2位に入り、「学校生活で培った集中力や粘りが生かされた」と話す。現在、宮崎市・大淀中陸上部監督を務める大山は、「目標を高く持ち、自分の可能性を信じて部活も勉強も頑張ってほしい」と母校の後輩にもエールを送る。

男子バスケットボール部は1972（昭和47）年から全国高校総体県予選を3連覇。黄金時代を築いた。初優勝時の中心選手だった9回生の佐多裕之(57)＝宮崎市清武町・宮崎東高校長＝は「優れた能力の選手がそろい、負ける気がしなかった」と述懐。

チームには小松原、五十市中などから足が速く、シュート力のある選手が集まっていた。指導者にも恵まれた。競技経験のある若手監督、内山孝徳（故人）は選手たちと共に汗を流しながら脚力を重点的に強化。常勝軍団を築き上げた。同じく9回生の堀内泉(58)＝都城市南鷹尾町・乙房小校長＝も「スピードとスタミナがあり、チームワークも抜群だった。だからこそ3連覇を成し遂げられた」。

バスケットボール男子の全国高校総体県予選で初優勝を果たしたメンバーら（1972年度卒業アルバムから）

現在、男子バスケットボール部は16人。3年生が引退し、新チームは今月の全国選抜選手権県予選と11月の県新人大会に向けて練習に励んでいる。近年は上位進出から遠ざかっているが、主将の徳峰章椰(17)は「いつか先輩たちに追い付けるように練習から工夫し、チーム一人一人の意識を高めていきたい」と意気込んでいる。（敬称略）

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈12〉

部活動㊦

書道や演劇協調育む

しーんと静まり返る教室で黙々と筆を走らせる都城西高書道部。普段はあどけない表情の部員たちも、筆を握れば真剣なまなざしに変わる。

同部は上位大会へつながる県高校席上揮毫（きごう）大会で、9度の団体優勝を誇る古豪。現在は1、2年生の女子部員9人が、各種大会やコンクールでの上位入賞に向けて切磋琢磨（せっさたくま）している。これとは別に、2010年に始めた葵碧祭（文化祭・体育祭）での書道パフォーマンスは大きな活躍の場となっている。

同祭文化の部オープニングでは軽快な音楽に合わせ、踊るようにして筆を操る。今年は「勇往邁進」という言葉を力強く書き上げ、部員たちは「受験や勉強、部活において、それぞれ目標に向かって全力で突き進もうという思いを込めた」と話す。

顧問の小篠貴子(40)は「芸術にいそしむことで豊かな心が育まれる。同じ志を持つ仲間と過ごすことで協調性が生まれ、視野も広がっている」と成長を口にする。

専用の稽古場がなく、化学講義室などで汗を流すのは演劇部。県高校総合文化祭の上位6校だけに出場が許される県大会には過去8度出場した。うち05年は「エンドレスガール」という創作劇で最優秀賞に輝き、九州大会に進んでいる。

俳優の温水洋一は同部のOBで、大先輩に続こうと部員たちは日々稽古に励んでいる。大会前には「会話は自然に」「もっと動きを付けて」とせりふの言い回しや表現、動作などを何度も確認。稽古は下校時間ぎりぎりまで続く。

今年は、県大会3年連続出場を逃した昨年の悔しさを胸に県高校総合文化祭に臨んだ。演じたのは事故で双子の姉を失い、精神的に不安定になりながらも力強く生きる少女の物語「夕暮れのプレリュード」。創作劇で家族や命の大切さを表現した。

熱演は実らず雪辱を果たせなかったが、部長の普通科2年長友みなみ(17)は「伸び伸びと演技をするのが演劇の醍醐味（だいごみ）。結果は残念だったけれど達成感や充実感はあった」と笑顔。同科1年米澤怜美(15)も「来年は必ずリベンジする。先輩から吸収できることは貪欲に吸収していく」と力を込める。

（敬称略）

葵碧祭文化の部で書道パフォーマンスを披露する書道部

きりしま

校訓　理想　優雅　自主自律

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈13〉

野球定期戦

選手とスタンド一丸

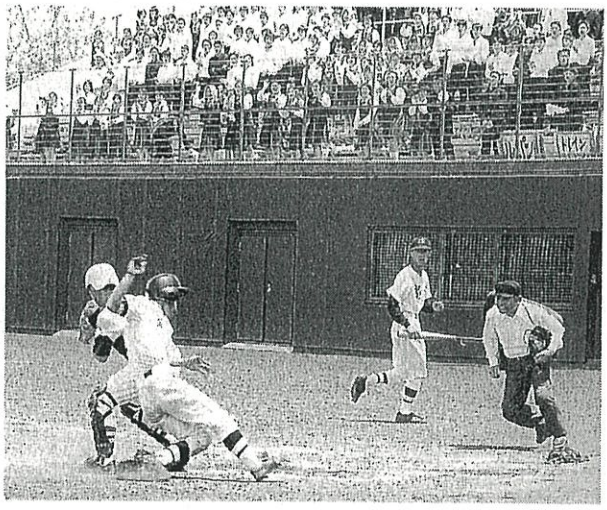
1966（昭和41）年6月7日。晴天の下、都城市営野球場で都城西高と都城泉ケ丘高の野球部による初めての定期戦が行われた。選手は母校の名誉を懸けてプレーし、スタンドの一、三塁側それぞれに並ぶ生徒は熱いエールで応援合戦。両校の長年にわたる伝統の一戦が幕を開けた。

「有名だった早慶戦をまねて始まった」。都城西高の初代野球部監督・隈元次也(82)＝都城市千町＝は、そう振り返る。当初は春と秋の年2回の開催。同校の戦績は思うように振るわず、第1回から7連敗を喫するなどして負け越しの時期が長く続いた。

そんな状況を変えたのが80年に監督となった里岡勝郎(70)＝同市妻ケ丘町＝だ。勉強に力を注ぐ学校にあって、練習時間の確保は難しかったが、「しっかりと気持ちを切り替える大切さを説いた」。授業を終えると部活に集中させて量より質にこだわった練習でレベルアップを図った。81年から破竹の13連勝で大きく勝ち越すことに成功し、里岡は「都城泉ケ丘高に追い付け、追い越せを掲げて大学進学を重視していた中で、選手たちは文武両道で頑張ってくれた」と目を細める。

定期戦は90年から年1回の5月開催となり、今年で62回を数えた。都城西高の通算戦績は30勝5分け27敗。不振から脱却できたのは、指導者や選手の日頃の努力が実を結んだのはもちろんのこと、スタンドから声援を送る生徒の存在も大きい。

チャンスになれば打席に立つ選手の名前を力いっぱい叫び、ピンチのときには必死にチームを鼓舞する。今年の定期戦でも吹奏楽部の曲に合わせて踊ったり、メガホンを打ち鳴らしたりして懸命に後押し。結果は2−2で17年ぶりの引き分けに終わったが、グラウンドの選手たちには惜しみない拍手が送られた。



〝都城の早慶戦〟として続く都城西高と都城泉ケ丘高の野球定期戦（1995年度卒業アルバムから）

主将だった3年の中島拓郎(18)は「声援のおかげでチームのムードが高まり、普段には見られない好プレーも飛び出すのが定期戦。力も湧いて好勝負を繰り広げることができた」と感謝。応援団長を務めた3年の新西祐汰(18)も「50周年という思いを胸に全校生徒が一丸となれた」と語る。

〝都城の早慶戦〟は生徒の愛校心を深めるとともに結束も強めている。

（敬称略）

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈14〉

葵碧祭

文化と体力競う祭典

クラス対抗の合唱や展示などで盛り上がる文化祭、団ごとに力と技を競い合う体育祭。都城西高ではこの二大イベントを「葵碧祭(きへきさい)」と称し、3日間にわたり行う。期間中は学校の雰囲気もがらりと変わり、生徒たちの祭典は派手ににぎわう。

体育祭は1963(昭和38)年、文化祭は66(同41)年のスタートで当初は別々に開かれていた。文化祭ではグライダー作りが一時期はやり、10回生の持永和則(56)=都城市下長飯町=も3年生だった73(同48)年に6、7人のクラスメートと挑戦した。

夜遅くまで学校に残り、1週間ほどかけて製作。木枠にビニールを張り付けた全幅約10メートルのグライダーが完成した。当日は大勢が見守る中、担任の教諭が車で引っ張ると、機体はふわりと離陸。そのままグラウンド上を見事滑空した。仲間と歓喜した持永は「時間は10秒ほどだったが、飛んだことに感激した。手伝ってくれた先生の理解もあり、一番の思い出になった」とほほ笑む。

体育祭と文化祭が一緒になったのは創立15周年を迎えた78(同53)年。「葵碧祭」の名称は、生徒会長を務めていた15回生の吉川博幸(51)=兵庫県川西市=が付けた。吉川は「当時のスクールカラー『青』にちなんだ言葉や漢字を生徒に募集して、多く寄せられたのが『葵』と『碧』の文字だった」と明かす。

その2文字で「葵碧」という言葉を作ったが、「存在しない言葉に反対する先生もいた」と吉川。そこで意味付けしようと生徒会や数人の教師で考え、「葵」は若者の活気に満ちた躍動、「碧」は紺ぺきの空のような若者の無限の力とした。「葵碧」は、現在スクールカラーを示す言葉にもなっている。

1973年の文化祭で、自動車に引っ張られ宙に浮いた手作りグライダー（持永和則さん提供）

今年の葵碧祭は「繋〜つなぐ〜」をテーマに9月7〜9日に開かれた。小村則弘校長は「50周年の伝統を未来へつないでいこう」とあいさつし、生徒たちは合唱で伸びやかな歌声を響かせ、バンド演奏などの発表では会場が熱気に包まれた。

体育祭も晴天に恵まれ、赤、白、青団が熱戦を展開。生徒会長を務めた普通科2年和田悠希(17)は「例年以上の盛り上がりだった。みんなの心に残る葵碧祭になったはず」と最高の3日間を振り返った。(文中敬称略)

きりしま

校訓　理想　優雅　自主自律

さらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈15〉

年中行事

修学旅行で企業研修

都城西高の年中行事は葵碧祭をはじめ数多くあり、高校生活に彩りを添えている。毎年秋に開かれる芸術鑑賞教室では、1年ごとに古典芸能、演劇、音楽を鑑賞。本年度は和泉元彌の狂言ライブが催され、感性を磨いた。

多彩な行事の中で、生徒たちにとって特別なのは修学旅行だろう。始まりは1964（昭和39）年。3月30日～4月5日の日程で京都、奈良、東京を訪れた。参加したのは普通科と家政科の女子生徒だけで、気の合う仲間と各地の観光スポットを巡った。旅先では深い青緑色の制服がモダンな感じで珍しく、注目を集めた。すれ違う人から「どこの高校ですか」とよく声を掛けられたが、返事は都城弁丸出し。そのギャップに驚かれたそうだ。

文科コースが新設された95年度には海外への修学旅行も始まり、生徒たちはシンガポールなどを訪問。身に付けた英語力を駆使して国際交流を楽しんだ。本年度は来年1月に2年生約240人が東京・長野、米国ロサンゼルスの2コースに分かれ、思い出を紡ぐ。

国内コースはスキーやディズニーランドを満喫するだけでなく、昨年度からは研究機関や企業での研修も行っている。視野を広げ、進路選択の材料にしてもらうのが狙い。昨年度はフロンティア科の理系生徒と希望する生徒が、宇宙航空研究開発機構（JAXA）調布航空宇宙センター（東京都）や資生堂鎌倉工場（神奈川県）などを訪問。超音速実験や化粧水の浸透力テストなどの最先端技術に触れ、刺激を受けた。

生徒たちは事後の報告書で「新たな分野について学ぶことができ、知識を広げることができた」などと、意義ある時間だったことを強調した。キャリア教育という表情が加わった修学旅行は、楽しいだけではなく、生徒が自らの将来を思い描く貴重な機会になりそうだ。

都城西高初めての修学旅行。当時の参加者は女子生徒だけだった（1回生の中馬圭子さん提供）

同校が歴史を重ねる中で、姿を消した行事もある。2003年度まで32年間続いた長距離徒歩は、卒業生の記憶に強く残る。体力増進、気分転換などが目的。数十キロを歩くのは大変だったが、その間のおしゃべりは楽しかった。ゴールではPTAの用意したうどんが、疲れを癒やしてくれたという。

（敬称略）

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈16〉

生徒会

多すぎるほど立候補

「学年に関係なく、西高を一つにする接着剤のような役割が果たせる生徒会にしたい」。今月10日、都城西高では生徒会役員の立候補者による演説会があり、普通科2年の宮田春香(16)は全校生徒に自らの思いを訴えた。

生徒会役員の任期は半年間。本年度後期には宮田ら1、2年生22人が手を挙げた。定数がないため、選挙ではなく信任投票の形を取る。結果、全員が信任され、宮田は生徒会長に就いた。

役員は風紀、図書、美化、新聞など11委員会の委員長を務め、各クラスから選出された委員を束ねて活動する。しかし、生徒会の醍醐味（だいごみ）は何といっても各種行事の企画・運営だ。新入生のオリエンテーション、都城泉ケ丘高との定期戦、クラスマッチ、文化祭…と枚挙にいとまがない。

多忙なのだが、役員の「なり手」には不自由しない。本年度前期は何と28人が意欲を示し、さすがに学校側も「多すぎる」ということに。結局、20人が立候補し、残りは文化祭の実行委員などに回った。4月に転任してきた生徒指導部長の園山信一(53)は「こんな学校は初めて。なり手がおらず、学校側が生徒を一本釣りして何とか生徒会を組織するところもあるのに…」と驚きを隠さない。

生徒会顧問の佐土原千香(32)は「高校生活の中で『もっとやりがいが欲しい。もっと楽しみたい』という思いがあるのでは」と考える。動機はどうあれ、佐土原は「人前に立つ機会が多いので、自信がなかった子もしっかりしてくる。全校生徒をまとめる上で、目配り気配りが身に付くなど人間的な成長が見て取れる」と実感する。

本年度後期の生徒会役員として22人が信任された。会長の宮田（前列右から２人目）は「みんなに『学校は楽しい』と思ってもらえるよう頑張る」

普通科3年の大峯未詩(18)は昨年度の前、後期の2期連続で生徒会長を務めた。大峯は生徒会のこと、クラスのことを何でも自分一人の力でやり遂げようとする傾向にあったが、それが次第に変わっていったという。

「20人も役員がいたら意見の違いも出てくる。それらを受け入れ、全体が動くようにまとめられるようになった。また、20人の仕事、役割を均等にした。そうでないと全員の成長が望めないから。こうしたことを考えられるようになったのも生徒会長をさせてもらったおかげ」と語り、貴重な経験に感謝する。（敬称略）

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈17〉

思い出の味

生徒との交流に感謝

都城西高から北へ100㍍ほどにある一軒のラーメン屋。約40年前にオープンした赤いのれんの「大吉ラーメン」には卒業生たちの思い出が詰まっている。

豚骨スープに中太のストレート麺、その上に味の染み込んだチャーシューやモヤシが載ったラーメン。この一杯を1990年代は350円、学生にはさらに50円引きで提供していた。安い上に、どこか懐かしい素朴な味に引かれた生徒たちは常連客となり、休み時間に抜け出して来ることもあったという。

コンビニエンスストアが増えるにつれて訪れる生徒の数は減っていったが、〝あの味〟を今でも恋しく思う卒業生は少なくない。90年に店を引き継いだ柳田武行(77)は「『おじさん元気?』と訪ねてくれる子がいるからやめられない」、妻征子(73)も「店の前を通る生徒たちは孫のような存在だね」と目を細める。

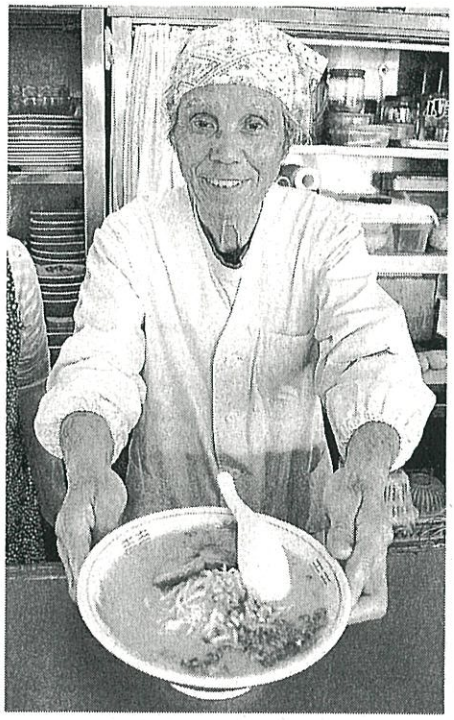
校内の売店では一時期、凍らせた乳酸菌飲料の「ジョア」が飛ぶように売れていた。教室にエアコンがない時代に、体を冷やしてくれたデザート。現在は販売されていないが、20回生で同校英語教諭の廣池克行(47)は「暑い夏を乗り切るためには欠かせず、早く買いに行かないと売り切れてしまうほどの人気商品だった」と回想する。

同校のすぐ隣には「じだま」の愛称で生徒たちに親しまれた店もあった。正しくは「児玉商店」。5年ほど前にシャッターを閉めたが、パンやお菓子、アイスクリームなど豊富な品ぞろえで生徒たちを喜ばせた。

「昔は、みんなが『おばちゃん』と呼んで気軽に来てくれていた」。店主だった児玉美代子(75)は懐かしそうに振り返る。店は校舎が完成した63(昭和38)年に開業。学校周辺に他に店はなく、昼休みや放課後には小腹をすかせた生徒たちでにぎわった。

閉店時間は午後8時だったが、帰りの遅い部活動生のために延長したことも。そんな優しい心遣いも人気の一つで、生徒から修学旅行のお土産や卒業式の花をもらうこともあったという。

同校と共に人生を歩んできた児玉にとって忘れられない思い出ばかり。「こんな小さな店でもたくさんの生徒が来てくれた。楽しく過ごせたことを感謝したい」　(敬称略)



卒業生の思い出が詰まっている都城西高近くの大吉ラーメン

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈18〉

PTA

うどん作り合格祈願

校舎もない中で産声を上げて進学校としての地位を築き上げた都城西高を、草創期から支え続けているPTAがある。

PTAは学校教育の充実、生徒の健全育成を掲げて開校直後に発足した。一からの学校づくりに対する意欲は並外れており、創立15周年記念誌には「札幌農大を理想とし、校内を銀杏の森にしようと夢のような計画を立てたのも懐かしい思い出の一つ」といった秘話も残されているほど。校舎が建てられた1963（昭和38）年に保護者へ呼び掛けた植樹は、現在のイチョウやナンキンハゼなどが枝を揺らす緑豊かな学びやの礎になった。

現在は学力向上、生活指導、会報編集、生涯学習の四つの委員会で構成され、さまざまな活動を展開。代表的な取り組みの一つに、生徒たちの大学合格を祈る「合格うどん」がある。うどんの振る舞いは、もともと恒例行事だった長距離徒歩で行われており、その終了を機に2005年に開始。大学入試センター試験を控えた年明けの間もない時期に、保護者による「屋外うどん店」がオープンする。

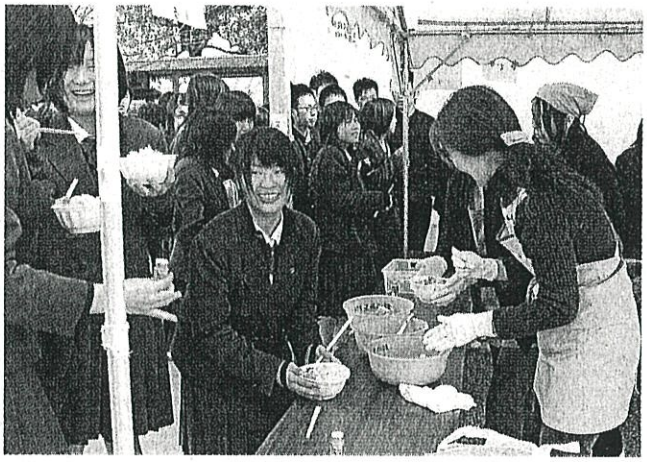
具材には「合格」の文字が入ったかまぼこ、だるまに似せた黄身2個のゆで卵など縁起物ばかり。愛情もたっぷりで、副会長の山﨑利江子(45)＝都城市蓑原町＝は「子どもたちに頑張ってもらいたい一心で開いている。親が関わる行事が少ない中で、貴重なコミュニケーションの場。保護者間の交流を深める機会にもなり、それが活発なPTA活動、学校の盛り上げにつながる」と意義を強調する。

また、かつては教育振興会という経済的な支援を行う組織もあった。PTA役員OBが中心となり、お金を少しずつ出し合って学校の発展や環境整備に寄与したという。

創立30周年では、校章をモチーフにしたモニュメントの建設資金も援助。同会副会長やPTA会長を務めた河中功(73)＝同市都原町＝は「振興会は、PTAにはできないことをしてくれるありがたい存在だった。何かあれば、学校のためにお金を集めて寄付していた」と話す。

その後もクーラーを設置するなど同校の良き理解者として在り続け、創立40周年を節目にその役割を終えた。

（敬称略）



生徒の大学合格を祈る「合格うどん」。2005年に始まり、PTAは愛情たっぷりのうどんを振る舞っている

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈19〉

同窓会

1回生卒業時に発足

今年2月11日。都城市内のホテルで、都城西高同窓会「葵碧会」（1万8024人）主催の交流会が開かれた。集まった卒業生は300人以上。老若男女が旧友や恩師との昔話に花を咲かせ、校歌を斉唱するなど青春時代を懐かしんだ。

1回生の卒業と同時に発足した同窓会は、創立40周年を機にスクールカラーを示す「葵碧」を名称に取り入れた。当初は卒業生の結び付きを強めようと活発に活動。交流会は正月三が日に毎年開き、コメディアンやタレントを呼ぶなど派手だったという。創立15周年記念の際には、学生時代を再現する劇に取り組んだり、会報を年に数回発行したりもした。

その後、交流会が不定期になるなど活動が停滞した時期もあったが、2008年からは2年に1度のペースで交流会を開催。参加者数をより多くするため、還暦を迎える世代で実行委員会を毎回組織する工夫も行っている。

招待状や当日に使用する名札、プログラムの作成…。実行委は準備で大忙しとなるが、「みんなが一堂に集まるめったにない機会。記憶に残り、次も参加したいと思えるようにしなければ」と責任感が芽生えるという。参加者は最初の08年こそ150人ほどと寂しかったが、10年は200人を超え、今年は300人を突破した。関東、関西支部でも交流会は開かれ、卒業生は遠く離れた母校に思いをめぐらせる。

都城市の職員でつくる同窓会「ウエスト会」（205人）も歴史が深く、今年で結成40周年を迎えた。同校を卒業した職員の大半が加入しており、加入率100％の時代もあったという。

今年2月に開かれた葵碧会の交流会。300人を超える卒業生が集まった

主な活動は、新年会や慰労会など。会員同士の連帯感を生み、仕事の円滑化にもつながっている。葵碧会と連携し、交流会への参加呼び掛けにも積極的に協力。今年は節目を祝って母校に10万円の寄付も行った。

会長で7回生の東博久(60)＝健康部長＝は「職員たちは都城西高の卒業生という誇りと自覚を持って仕事に臨んでいると思う。ウエスト会の設立目的の一つは母校の発展に寄与すること。これからも記念の年や大きな行事などの際には惜しみなく協力していく」と語る。（敬称略）

校訓　理想　優雅　自主自律

きりしま

きよらに燃ゆ

都城西高創立50周年

〈20〉

卒業生

教育や芸能 多数活躍

教育や芸能、文化、スポーツ…。多彩な分野に身を置いて活躍する都城西高卒業生にとって、創立50周年を迎えた母校は誇りであり、思い入れは深い。

1回生の大石（旧姓林）三世子(66)＝東京都＝は日展会友の書家。書道教室を開きながら、グループ展なども行っている。高校時代に一番記憶に残るのが新しい校舎へ移転したこと。「時間があれば運動場の整備。石ころを拾ったり、草を刈ったりして大変だったが、学校を一からつくっているというのがうれしかった」と声を弾ませ、「1回生は3クラスしかなかったが、全員が家族みたいな存在で楽しかった」とも話す。

九州大理学部教授で、ホルモンの働きを研究するなどしているのは5回生の下東康幸(62)＝福岡県。勉強漬けだった高校生活に、「都城泉ケ丘高に負けるなという時代。夏休みは学校で水の入ったバケツに足を突っ込み勉強していた」と苦笑する。さらに「先生方も毎日、問題集の答えの添削を快く引き受けてくれた。情熱があり、学校を盛り上げようという気概にあふれていた」と感慨深げに話す。

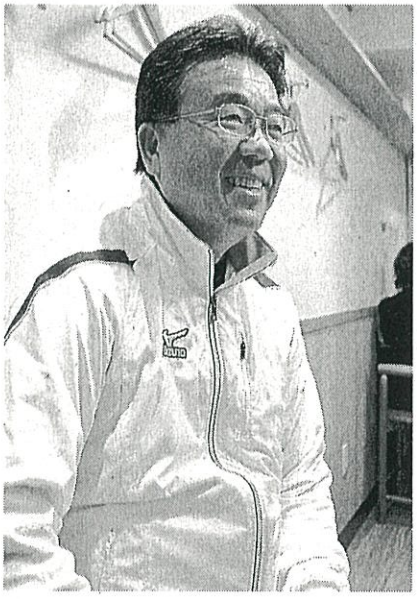
20回生の益田明典(47)＝大阪府＝は大学進学後、プロ野球・巨人に入団。投手として1軍マウンドに立ち、現在は同球団のスカウトを担当する。高校時代はエース。「定期戦は勝って当たり前の時代で、生徒が見守る試合は気持ちの入り方が違った。プロという夢にたどり着けたのは都城西高で勉強も部活も頑張れたから。今も野球の仕事に携われているのも母校のおかげ」と感謝する。

19回生の温水洋一(48)＝東京都＝は名の知れた個性派俳優。高校時代は演劇部で、「思いを寄せていたクラスの女性に『向いているんじゃない』と勧められたことが入部のきっかけ。動機は不純だったかもしれないが、人前で表現する楽しさに引き込まれた」と明かす。在校生には「勉強も部活も趣味も夢を持って思い切り取り組んでほしい。できれば楽しく。高校時代にしかできないことはたくさんある」とエールを送る。

巣立った生徒の数は1万8024人に上る。校舎も校名もない出発点から大きな成長曲線を描く同校。これからも全国、世界へと羽ばたく生徒を育て続けていく。（敬称略）

（都城支社・小川祐司、赤塚盟）

＝おわり＝



野球関係の仕事に携われている今を「母校のおかげ」と感謝する益田明典